

# こうして見取る！ 道徳の評価

## 評価の目的

- 1 教師の授業を評価する。
- 2 子どもの変容を評価する。
- 3 子どもの自己評価能力を高める。

## 学習履歴図

学習履歴図は、毎時間の授業の後に、授業に対する子どもたちの意識を簡単に記録するものです。ある程度まとまった期間の記録を一覧化できるので、授業に対する意識の変容や成長が子ども自身にとって分かりやすく、教師にとっても、毎時間の子どもの変容を見取り、大きく評価の資料とすることができます。

2/15	2/8	2/27	3/11	3/18	3/11	3/21	月日
授業内容	...	...	...	...	...	...	ばんこう
笑顔	😊	😊	😊	😊	😊	😊	かおマーク
モロモロ... ...	...	...	...	...	...	...	ひひひ
...	...	...	...	...	...	...	...

学習履歴図の特長は、

- 時間をかけずにすぐに書ける。
  - 評価規準は自分の印象でよい。
  - 継続した意識の変容や成長を見取ることができる。
- ということ。

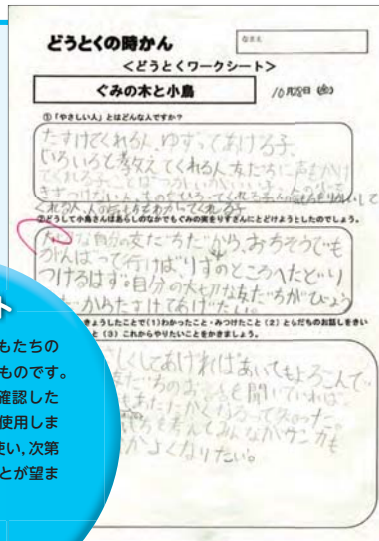
継続して自己評価を繰り返すことで、子どもの授業に対する観点が定まってくるでしょうし、教師にとっても一単位時間だけでは分からない長いスパンでの評価が可能となります。

学習指導要領解説に書かれている「大きく評価」にも対応するものでしょう。

授業を受けた後の気持ちや感想を、顔や矢印で描かせるだけでなく、どうしてその顔・矢印にしたのかを考えさせたり、発表させたりすることが重要です。それを受けて「○○さんは、□□という気持ちからこの顔にしたのですね。」などと教師が意味づけをしてあげましょう。

## ワークシート

ワークシートは、子どもたちの最低限の学習を保障するものです。全体として共有したり、確認したりする内容があるときに使われます。あくまでも補助的に使い、次第に自由度を広げていくことが望まれます。



## 道徳の評価の基礎・基本



### 【子ども】

- 変容
- 行動の原動力となった心

- 認める
- 意味づける
- 称賛する

### 【教師】

\*注視する

子どもの道徳的に望ましいと思われる行為・行動の過程

## 道徳ノート

道徳ノートは、子どもたち一人ひとりの学びの充実を図るために欠くことのできないものです。授業中の学びを記録するだけでなく、考えをまとめる際の補助や、授業後の活動の記録など、道徳の授業を実生活での実践へとつないでいく羅針盤とすることができます。

学習履歴図やワークシートに慣れてきたら、次第に書く分量や自由度を広げていきます。その受け皿として、道徳ノートは必需品です。

とはいえ、書くことが細かく決まっていたら、ワークシートと変わりません。ノートならではの特長を生かし、最終的には子どもたちに自由にレイアウトさせたいものです。

一般に、ノートのもつ役割・意味は主に次のようなものです。

- 記録、練習
- まとめ、定着

これは、どの教科でも同じでしょう。加えて、道徳ノートには、以下のようなものが必要だと考えます。

- ◆意識の継続、再認識、考え直し、醸成
- ◆発展的思考の喚起、実践を伴う実感理解

### ◆意識の継続、再認識、考え直し、醸成

授業中に全てが解決することはありません。「分かっていたつもりが、分かっていたいなかったことが分かった。」「もっと考えたい。」ということに気づくことも、大切な道徳の学習です。

要は、考え続けられるかどうかです。そして、考え続けることに必要な道具が、継続して思いや気づきを書き留めることのできるノートなのです。

### ◆発展的思考の喚起、実践を伴う実感理解

道徳ノートに書き留めていった疑問や問題意識をもちながら、実生活や次の授業へと臨むことで「ああ、そういうことか。」「この人も同じだな。」などと、実生活での実感や理解につながっていきます。その繰り返し、いつか「真に分かった!」となり、自然に自分自身の生き方につながっていくのです。

子どもたちの自由な発想でレイアウトできるように、余計な制限はなくした道徳ノートを活用していけるようにしたいものです。

学習スタイルに一定のひな形や押さえどころが必要な場合、ワークシートで共有事項を示すと、教師も子どもも方向性を見失わずに授業を進めることができます。

とはいえ、微に入り細に入り、必要以上に方向性を限定してしまうと、子どもの活躍できる場面が少なくなります。ちょっと立ち止まって考えたいと思う子、多面的・多角的な観点から別のところが気になっている子などの思いが生かされるように、ワークシートにおさまらない意見も大事にしましょう。

道徳教科書の教師用指導書の付録にはワークシートが収録されていますが、そのまま使うというよりは、指導者の思いや子どもたちの実態に応じて、取捨選択し、データを修正して使うことで、よりよい活用方法が見えてくるでしょう。